「時間旅行」の指南書

大出　尚子

村松弘一・貴志俊彦編
古写真・絵葉書で旅する東アジア150年

B5判　176頁
勉誠出版
［本体 3,800円＋税］

昨今、戦前からの歴史を有する大学によって、これまで地道に収集・整理・保存してきた資料を様々な形式で公開・展示する試みが活況を呈している。表題には明記されていないが、本書は学習院大学が所蔵する画像資料公開の取り組みの一つである。旧制学習院時代の古写真・絵葉書コレクション約一二〇〇枚については、すでにその一部が学習院大学史料館・同東洋文化研究所ホームページのバーチャルミュージアム、および『アジアを観る――学習院大学所蔵古写真・絵葉書・ガラス乾板』（学習院大学、二〇一五年）で公開されている。二〇一四年四月、学習院大学に国際研究教育機構が発足し、二〇一五年から三年間、本書の編者である村松弘一氏を中心に「東アジアの都市における歴史遺産の保護と破壊――古写真と旅行記が語る近代」プロジェクト（略称：古写真プロジェクト）を実施した。古写真プロジェクトの成果である本書は、機構が新たに収集した古写真・絵葉書約二〇〇〇枚のなかから約三〇〇枚に分析を加え、一般読者に分かりやすい解説を付して掲載したものである。

中国古代史・近代中国文物史を専門とする村松氏は、学習院大学所蔵のアジア関係資料の整理・分析を主導し、その成果を出版物や展示会等で公にしてきた。もう一人の編者で二〇世紀東アジア史を専門とする貴志俊彦氏は、著書『満洲国のビジュアル・メディア――ポスター・絵はがき・切手』（吉川弘文館、二〇一〇年）に代表されるように、戦前期に作成されたエフェメラル・メディア研究を推進してきた。また、京都大学が所蔵する写真資料の編集・出版、さらには絵葉書データベースの国際的連携を手がけるなど、画像資料の公開・

利用に尽力してきたことでも知られる。

「旅のはじめに」によると、本書は読者に対し、学習院大学が所蔵する資料を活用して「時間旅行」をしてもらうこと、本書を片手に実際に東アジアの都市をめぐってもらうことを期待している。編者のいう「時間旅行」を可能にする次の二つの要素が、本書の特色にあたる。第一に、一八九〇年創刊の『学習院輔仁会雑誌』に掲載された教員・学生の旅行記を本文執筆に利用するとともに、「旅を語る言葉」というコーナーを設けて紹介している。一読すると分かるが、この旅行記がかなり効果的で、彼らが古写真・絵葉書のなかに居るような、また彼らの目に映る都市の風景や現地の人々の息遣いが伝わってくるような感覚を読者に与える。第二に、各都市の執筆担当者がフィールドワークを行い、絵葉書・古写真と同じアングルから現在の様子を撮影し、紙面に併置して風景の今昔を比較している。この試みは、様変わりした風景のなかに屹立する建物に、読者が思い思いの考察を加えることを可能にしている。

さて、ようやく旅に出るとしよう。本書の構成は、以下のとおりである。

「旅のはじめに」
「絵葉書の誕生」
「本書とあわせて――絵葉書・古写真データベースの利用」
◆中国東北部（旧満洲）を旅する：大連／旅順／瀋陽〔奉天〕／撫順／長春〔新京〕／哈爾濱
◆華北を旅する：北京／西安／青島／済南
◆華南を旅する：上海／杭州／蘇州／南京／香港
◆台湾を旅する：台北／台中／台南
◆朝鮮半島を旅する：ソウル〔京城〕／仁川・水原／慶州・大邱／釜山／平壌
「旅のおわりに――描かれた近代都市・建築をめぐって」

古写真・絵葉書は白黒ないしカラー印刷で、今昔の風景の見事な対比に評者の足も止まる。キャプションには、所蔵機関と発行年記号および解説が付される。記号の意味は「凡例」（八頁）にあるが、【学】＝学習院大学所蔵版のうち、中国東北部（旧満洲）の資料の出典が示されていない。華北以降の古写真は、各末尾に出典が示されているため、統一されると良かった。地図は見やすく、広域図あり、拡大図あり、市街図や城内図あり、古写真・絵葉書の撮影場所が地図上に数字で示され、読者にやさしい。

各都市については、編者二名のほかに学習院大学国際研究教育機構のＰＤ共同研究員五名・リサーチアシスタント五名

が執筆を分担している。必ずしも専門分野に近接した都市を担当しているわけではないなかで、各人が都市ごとにテーマを設定し、調査の労が垣間見える。ただ、評者はページを順に繰っていったため先入観を持って読んだ訳では無いが、各都市の内容に多少の濃淡がある感は否めない。また、評者がこれまで中国東北関連の書籍に触れてきたためか、同地方に関しては、「読者のためのブックガイド」（一七四～一七五頁）を見ずとも都市・建築研究の参考文献が具体的に思い浮かんだ。

目を引いたのが、「台北」「台中」「旅の道標」⑯で、絵葉書の撮影時期を推測している点である。例えば、台湾総督府新庁舎のキャプションには、「囲いがあることから建築中だと考えられる。総督府の完成は一九一九年だが、この絵葉書の発行は一九一八年三月までであるため、写真は一九一七～一八年に撮影されたものと推測できる」（一三二頁）と記されている。絵葉書に示されたごく限られた条件から撮影年代を推定するという試みは、画像研究の醍醐味といえる。なお、上述した三つの記事は武藤那賀子氏が執筆している。

コラムにあたる「旅の道標」は一七のテーマがあり、そのなかで評者は、「学習院修学旅行生の奉天滞在と見学先の変遷」「シリーズもの絵葉書」「高松宮宣仁親王下賜絵葉書」「学習院で学んだアジアからの留学生」を興味深く読んだ。ミニコーナー「あの作品の舞台」は、各都市を舞台としたドラマ・アニメ・漫画・映画一二作品を紹介している。いずれも二〇〇〇年以降に製作された比較的新しい作品なので、一般読者にも目にしやすい。

本書で扱う戦前期の海外修学旅行（三七頁）および文化財の盗難・国外流出問題（八〇～八三頁）の二つは、東アジア史研究のなかで頓に関心が高まっているテーマである。海外修学旅行研究に関しては、特に日本の旧高等商業学校（高商）である一橋大学・小樽商科大学・滋賀大学等が、その成果を論考・冊子・ウェブ上等で多数公にしている。高商時代に記された日誌・旅行記・論文や収集資料を活用した研究の可能性を模索するなか着手された論題であるが、校史のなかで語られる体験にとどまらず、戦前期のアジア調査との関連から、帝国日本の体験として意味付けられてきた。学習院中高の海外修学旅行は、一九一八年に始まり、学生はその体験をもとに現地での様子を『学習院輔仁会雑誌』に寄稿した（六二頁）。例えば本書では、『学習院輔仁会雑誌』を利用し、満洲事変の戦跡が修学旅行の観光ルートに組み込まれていったことを指摘している（三七頁）。また、随所で『学習院輔仁会雑誌』の「北支那旅行記」（一〇六号、一九一八年・一一八号、一九二二年）「満鮮旅行記」（一三七号、一九二九年）「中支那の旅」（一六六号、

一九四〇年）を引用して画像資料とともに紹介している点は、学習院による海外修学旅行研究の成果として意義がある。

文化財の盗難・国外流出問題に関して本書では、西安における一九〇七年の「大秦景教流行中国碑」盗難未遂事件と、一九〇九年まで昭陵に確認できた「六駿」の国内外流出の二件について、問題が起きた直近の時期と現在の様子を示す写真資料とともに紹介している。評者も、瀋陽故宮（清代の盛京皇宮）において一九〇八年と一九〇九年に磁器の「外流事件」が起き、清室財産管理に対して危機感を抱いた奉天旗務処総辦の金梁（一八七八―一九六二）が、その保護を目的とした「皇室博覧館」の設立を建議した件を拙書（『「満洲国」博物館事業の研究』汲古書院、二〇一四年）で扱った。評者は本書を受けて、同時期における他地域の事例との比較や問題発生後の文化財保護の動きなど、研究関心が拡がった。

ここまで、学習院大学の所蔵資料について触れてきたが、貴志氏が担当する「香港」「平壌」は、京都大学東南アジア地域研究研究所グローカル情報ネットワーク「戦前期東アジア絵はがきデータベース」の写真画像も利用している。本書は、学習院大学所蔵の画像資料および『学習院輔仁会雑誌』に依拠した記事が大半で、全体的に「学習院色」が強い構成となっている。したがって、学習院大学所蔵資料の研究成果としてでも十分に意義があったが、そこに京都大学の資料と貴志氏が加わることで以下のような効果が得られたとみてよいだろう。

「旅のおわりに」では、古写真・絵葉書を含む画像研究の展望を語っている。画像の国際的な共有については、京都大学東南アジア地域研究研究所と米国ラファイエット大学との絵葉書データベースの国際的連携の試みを紹介し、絵葉書研究が「帝国」圏にとどまっていた段階から、今後、世界各地で作成された資料との国際比較の段階へと進むことを指摘している。本書を、学習院大学と京都大学が、国内の枠組みを超えた古写真・絵葉書研究の可能性を提示した研究書とするならば、京都大学所蔵資料はその国際化の架け橋としての役割を果たしたといえよう。

貴志氏は、本書を「画像研究、都市・建築研究、観光研究、文学研究を接合する意欲的な試み」（一七二頁）と総括する。文字資料だけでなく画像・映像・音声等の活用も可能である近現代史研究においては、本書のような手法による分野横断的な研究は、今後ますますの発展が見込まれる。

「時間旅行」が導いてくれたのは、様々な研究関心への入り口でもあった。一読を薦めたい。

（おおいで・しょうこ　中国近代史研究者）